

江戸時代の後期から明治時代にかけて、帆走する弁才船を描いた絵馬が盛んに奉納された。これらの絵馬は特に船絵馬と称され、上方と蝦夷地を結んだ北前船の寄港地に多く残されている。

弁才船の姿を伝えるものとしては船図面やひな型と称される模型、さまざまな絵画資料、古写真などが挙げられるが、中でも船絵馬は非常に数が多く、船体は図面のように正確で、帆装や乗組員の姿も的確に描かれるのが特徴である。弁才船は船の大小にかかわらず、船体はほとんど相

似形であるため、帆の反数（線の数）が多いほど大型の船ということになる。船絵馬では船の大きさに合わ

克明に描かれた帆走

船絵馬

い。中でも吉本善京、杉本清舟、絵馬藤など、船絵馬を得意とした絵馬師のことは船絵馬師といい、帆走技術についても十分な知識を持っていた。その一例として青森県深浦町の円覚寺に奉納された船絵馬から、弁才船の帆走技術の一端を紹介する。この絵馬では風は画面左から右に吹いており、春日

せて、乗組員の数も描き分けてある。大型船の代表である千石船では、24反帆が標準なので、帆の中に引かれた線は23本になり、乗組員の人数もそれに合わせて調整される。

写真の「春日丸・八幡丸」は海上で同一船主の船が反航する場面を描いている。和船に対する誤解のひとつに、洋式船と違って船底部に船体の横流れを防ぐキール（竜骨）が無いため風上

丸は左舷後方から風を受けて風下に進み、八幡丸は右舷前方からの風を風上に斜めに進んでいる。風上に向かう航法を間切り（マギリ）といい、和船で普通に用いられた航法である。帆に風を入れるため帆桁をひねり、右舷側の帆の縁

に取り付けた両方綱を船首方向に引っ張っている様子が描かれている。八幡丸の船首に上げられた小さい帆は、弥帆と呼ばれる帆で、出入港時やマギリの時に操船を容易にするために用いるものである。千石積弁才船を実物大で復元した「みちのく丸」（み



2代吉本善京画の船絵馬「春日丸・八幡丸図」=1836（天保7）年、青森県深浦町、円覚寺蔵（パネル展示）

横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所主催展覧会「和船と海運」
■横浜市歴史博物館会場「津々浦々 百千舟—江戸時代横浜の海運」20日まで（20日を除く月曜休み）。
■神奈川大学日本常民文化研究所会場「順風満帆 千石船—和船の構造と技術」17日まで（土日祝日休み）。

授・昆 政明

次回13日掲載

ちのく北方漁船博物館建造、現在青森県野辺地町所有の帆走ではこの絵馬を手がかりに、マギリを行い、成功させた。その様子を神奈川大学の会場ではパネル展示で、横浜市歴史博物館の会場ではビデオ上映で紹介している。